
ハンマースペース

彦星こかぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンマースペース

【Nコード】

N9211B

【作者名】

彦星こかぎ

【あらすじ】

女の子が気に食わない男の子をぶっ飛ばすためのハンマーを入れておく空間、「ハンマースペース」。それが実用化された世界で起こる、あんまりファンタジーらしくないファンタジー物語集。

(1) ラブコメの日々

発信者を見ると、恭二だった。

用事なら大抵メールで寄越す奴なのに、こういう風の吹き回しだろう。私はすぐに携帯を耳に当てて、恭二の特徴的なボソボソ声が聞こえてくるのを待った。

「あ、もしもし、美咲？」

……やっぱり、今日も冴えない。しかし話を聞くと、どうやらそんな感想をしみじみ抱いている時間はないようだ。

私は要領の悪い恭二の説明を辛抱強く聞きながら、ハンマースペースから引つ張り出したメモ帳にどうにか道順を書き込んで、息つく間もなく中古車に飛び乗った。ついでにCDとキャンディーの袋もハンマースペースから探し当てて、助手席にまとめて乗せる。運転はいつまで経っても上手くならないけれど、力加減はずいぶん分かるようになってきた。アクセルを踏み込み、道順を再確認する。

一体あいつ、何をやらかしたっていうんだろう。

警察に呼ばれて、事情聴取されたなんて。

「ハンマースペース」……ここ最近で急激に広まった新製品で、またの名前は「四次元ポケット」。正式名称は、「超小型異相空間発生装置」というらしい。その機能はおそらく、四次元ポケットをイメージすれば一番分かりやすいと思う。日用品程度ならほとんど無尽蔵に入る上に全く重くならない鞆、という事で、持ち物の多い学生や会社員を中心に大好評を得た。

形はさすがにポケット型では格好悪いという事なのか、小さな鞆やポーチのようなタイプがほとんどだ。デザインも色々あるが、何でも入るように口がかなり大きくなっている。私が使っているのは力ジュアルブランドから出ているウェストバッグ型の物で、教科書からノートパソコンからアルバイト先の制服まで、日常的に持ち運ぶ

ものは全部入っている。あまりにも便利なので、気付いたら今は常に身に着けているように思う。

確か初めて携帯電話を買ったときにもこんな感じで、いつも手元に置いていないと不安になる時期もあった。そんな位置付けのアイテムが、今はハンマースペースに変わって、携帯も大抵はこの万能鞆の中だ。慣れというのは恐ろしいほど素晴らしく、最近は携帯がハンマースペースの中で鳴っているのにも気付くほどになっている。ただし値段は、携帯並みというわけにはいかない………といってもこれも値下げ傾向にあり、私もカーナビを諦めれば高機能品が買えた。ちなみに「ハンマースペース」という言葉は元々、漫画やアニメを皮肉ったジョーク用語らしい。馬鹿みたいなラブコメディなんかでヒロインが自分の気分を害した男を天高く吹っ飛ばすなり地面にめり込ませるなりするために使う、あの特大ハンマーを入れておく空間、の事だそうだ。

警察署の前に、恭二は相変わらずしまりの無い姿勢で立っていた。

駐車スペースからはみ出ないようにゆっくりバックする私の車をじつと眺めていたが、私が出てくるのを見て初めて表情を緩める。未だに、私の車を見分ける自信がないらしい。

「……ごめん、急に迎え頼んだりして」

「それは別にいいんだけど。で、一体何やったの？」

恭二から大切なことを聞き出すときには、前振りなしでストレートに言うのが一番いい。玄關脇の柱に片手をついた私を見ながら、恭二は事情聴取なんて大して深刻な事態ではないかのように苦笑した。

「いや、僕のハンマースペースがちょっと容量オーバーしちゃったみたいで。あれ、空間膨らませすぎるとよくないらしいし、警察も悪用防止でぴりぴりしてて」

「ハンマースペースが……容量オーバー？」

「まあでもそれだけだったから、中身確かめて整理させられて、そ

れで終わりだったよ」

「そうじゃなくて！」

私はふさがらなくなりそうな口をなんとか動かして、何か前提が間違っている恭二の理屈をストップさせた。

「一体どうやれば、あんな半分無限に近いスペースを溢れさせられるの！」

「……え？」

私が大声を出しても、恭二のテンションは常に一定だ。戸惑ったように首を傾げるので、私は息をついて、言い方を変えてみる。

「その……あんだ、ハンマースペースに何入れてたの？」

一瞬の逡巡があったが、それでも恭二の返答はかなり素早かった。

「……………世界？」

恭二は迷わず後部座席に乗った。

なんとなく言葉が思いつかなくて、沈黙が漂う。しばらくして車がスムーズに走り始めてから、恭二は唐突にこう切り出した。

「あのさ、僕が最後に小説書いたのって、いつだった？」

「え？」

そういえば、最近は全然読ませてもらっていないし、書いたという話も聞いていない。

そんな調子だから忘れがちになっていたが、恭二は物語を書くのがそこそこ上手い。私と仲良くなるきっかけもその辺に由来している……高校時代、器楽部の部室から溢れて廊下で練習していた私の前を、隣の文芸部に通っていた恭二が毎日通っていたのである。世間話をしているうちに好きな作家から意気投合して、仲良くなった。その頃はしょっちゅう恭二の小説を読ませてもらっていたように思う。

同じ大学に入ってから、一緒に行動することは更に多くなったが、気付けば小説からは二人ともどんどん遠ざかっていた。

「最後に書いたのが、合格発表の後の春休みで」

私が考えている間に、恭二は話を進めた。

「それつきり、まるで書けなくなっただんだ……大学入って、一人暮らし始めてから」

「それって、環境が変わったからとか？」

「多分」

言って、恭二は後部座席に横になった。

「例えばさ……授業が終わって、帰ってくるじゃん」

「うん」

「部屋に入ると、すぐに台所があって、左は風呂場で」

恭二は今アパート暮らしだ。

「で……、分かるんだよ」

「何が？」

「流し台の下に何があって、洗濯機の上に何が置いてて、冷蔵庫の中身はどうか、……大体」

そりやそうだ。引越してからそんなに経っていないし、それに恭二はそこそこ整頓も上手い。

「散らかってても、その辺にあるのは僕が買ったものだけだし。…

…」

「……で、書けなくなっただけ」

「うん」

なんとなく、分からなくはない。

高校時代の恭二はむしろびっくりするくらいの多作家で、私は羨ましがってよく話の作り方を聞いたりしていたのだが……その、よく分からない説明によれば、物語は例えば「家族の話し声を聞きつつ部屋で昼寝をしていたら、筆笥の引き出しから弟が出て来たときに思いつくのだそうだ。別に恭二は児童向けファンタジーなんか書いていたわけじゃないし、だいいち恭二は末っ子なのだけにとにかくそういう事らしい。

もちろん今の恭二は一人暮らしだし、部屋にそんな重い家具は一つもない。

「町も妙に綺麗だし、道は広いし、家も大きいし、木もまっすぐだし虫はやたら元気だし……平らすぎる」

「まあ、同感かな」

私と恭二の故郷は、もっと暖かくて、もっと田舎の、もっと古めかしい町だった。イメージとしてはことは正反対。ごみごみしていて、城下町らしく入り組んでいて、神社の林はうねうね歪んだ松の木ばかり。湿気も多くて、生き物は暑さに悲鳴を上げているように、おまけに海のそばで、道の八割は坂道だった。よく目立つのは四階建ての小学校だけで、あとはどこも古い二階建ての住宅が続いていた。

「なんていうか、……ぐちゃぐちゃで、底が見えなくて、いつ何が起こってもおかしくないような世界観じゃないと、……書けない、みたいなんだ」

確かに、市街地は都会で一步出ると田んぼだけ、というこの町で、それを期待するのは難しいかもしれない。広いし、綺麗で、分かりますくて。

そして恭二は児童向けファンタジーなんか書かないが、シニールで不条理な出来事が起こる話はよく作っていた。電線の筋から空がひび割れる話とか、雑草を抜いたら地面が全部めくれ上がってしまった話とか、水溜りが底なし沼になる話とか。中でも私が一番好きだったのは……いや、今はそんな事どうでもいい。

確かに、ハンマースペースというのは見事にぐちゃぐちゃした空間だ。欲しいものはすぐ取り出せるけれど、底は全く見えない。取り出さなければ、入れたものは得体の知れない異次元に漂うばかりというわけだ。そこなら、何が起こってもおかしくない……少なくとも、おかしくないような気にさせられる。おまけに、あれに実は容量制限がある、なんていうことは、一般にほとんど認識されていないわけ。

そんな事を恭二に言うと、起き上がった恭二が軽く頷くのがバツ

クミラーに映った。

「手当たり次第に放り込んだら、意外とすぐ複雑になってくれたんだけどね……実家帰ったときに私物全部入れてきたり、それから……蟻とか忍び込ませたり、色々やった」

「で？　なんか書けそう？」

「……いや、まだ……」

「だろうね」

書いていれば、容量オーバーになんかならないはずだ。

「で……その話、警察にしたの？」

「うん」

「呆れられたでしょ」

「まあね。こっちが申し訳なかった」

恭二は今日初めて、楽しそうに笑い声を上げた。私もやっとほっとして、一緒に笑う。

「でも一応、僕の方は一生懸命だったんだよ？　書けないくせに、すごく書きたかったから」

「うんうん」

「美咲にもまた読んでもらいたかったし、ね」

突然の先制攻撃。

耳の周りが急激に熱くなってきた、私は慌ててキャンディーを口に入れた。

私のハンマースペースには、これより役立つものは入っていない。

（１）ラブコメの日々（後書き）

実はまだ続くかどうか分かりませんが、大学で発表したときに「続編が見たい」とのお声を頂いたので、ちよつと頑張ってみます。
美咲ちゃんは大好きなので、まだ使いたいな……

（２）中身がしれない

問題は、その責任を私が負わなければならないかもしれない、という事だ。

私は少なくとも……誇り高い、とまではいかなくとも、それなりに自尊心を持つ女子大生だ。しかも、結構な有名大学の。

それがどうして、いわれのない汚名を着せられなければならないのだ。

事の起りは、今日のシフトを私がたまたま変更したことにある。アルバイト先の服飾店には午前から正午までのシフトと午後以降のシフトがあり、私は大抵、授業の後午後のシフトに出ていた。それが今日はいきなり休講になったので、シフトを午前にして午後から遊びに行くことにしたのである。浩介が千奈美と仲良くなりたいたと言っていたので、恭二に声をかけて四人で遠出する機会を作ったわけだ。

それが。

午前のシフトによく出ている篠村さん、という同年代の女の子が、あまり評判がよくないというのは聞いていた。お嬢様が片手間に「おしゃれな職場」でお小遣いを稼いでいるという事だし、趣味は合いそうにないし、普段は一緒に仕事することもないので、これまで噂でしか聞いたことがなかった。

ところが……今日、シフトが終わる頃になって、篠村さんの財布がなくなってしまったのである。

大抵、私物は控え室のロッカーに入れることになっていた……で、シフトを終えた篠村さんが戻ってきて、ロッカーに入れておいた自分のハンマースペースを探したが、入っていたはずの財布が出てこないというのだ。

朝、篠村さんがお茶を買っているのを見た人がいて、財布が店の

どこかにあることは間違いないという。仕事中に財布を使う機会はないし、実際にロッカーからは出していないという。とはいえロッカーに鍵はないので、嫌な想像をしまつても仕方ないかもしれない。

しかし、その日シフト中に控え室に一人で行ったのは私だけだったのだ。

何故控え室に行ったのか、と言えば……要するに女の子の事情なのだが、私の方は切羽詰っていたので、そのとき自分の以外のロッカーがどうなっていたのかまるで覚えていない。しかも私のハンマースペースは近頃検索機の調子が悪く、必要なものを取り出すのにかなり手間がかかったのだ。それで妙に長時間がかかったわけだ……私が疑われる措置は十分、というわけだ。

「というわけで、しばらくバイト先から出られないの。浩介と千奈美にも謝っておいてくれない？」

隙を見て恭二に電話をかけると、間延びした恭二の声はしきりに「うん」を繰り返して私の言葉を覚えた。

「ええと……美咲、ロッカーの裏は見た？」

そのお気楽な様子は、私を少しだけほっとさせた。

「あ、それチェックしておくわ。ありがと」

しかし、だんだん現場は緊迫感を高めていった。何処を探しても、それらしい財布は出てこないのだ。篠村さんが言うには、白地にブランド名がピンク色でプリントされているらしいので、グレーっぽい用具の多い控え室の中では目立ちそうなものだが、ロッカーの下にも裏にも小机の周りにも見つからない。全員が自分のハンマースペースをチェックしたが、紛れ込んでいる様子もない。

悪いことに、さつきから篠村さんが私のことをじっと見つめている。

一応、篠村さんは被害者なので、誰も彼女を攻めるような視線は

向けていないが、それによって場の雰囲気は篠村さんが中心になっている。そして、彼女は明らかに私を疑っているのだ。

「本当になかったの？ 鳥居さん」

私を名指しときた。

店長は午後の仕事に出てしまっていて、場を統率しているのは篠村さんだけだ。帰るに帰れない午前シフトの五、六人が、私の方を迷惑そうに見ている。

「なかったわ」

断固としてそう返答する。焦って控え室に行ったことが悪事なら、私は今頃終身刑に処されている。

そうあっさり理解してくれる人物が相手なら、私は待ち合わせに間に合っただろう。

「本当にそう言うなら、ハンマースペースの中身全部出してみせなさいよ」

中学生かお前は。

それによってあけすけになってしまいう私のプライバシーは中学生の学生カバンの比ではないだろうし、一つ一つ出していくにしてもどれだけの量になるか分からない。一番大きいのは……広辞苑か。普通に考えて通るはずのない要求だが、長時間狭い控え室に留め置かれたメンバーの焦燥感は判断力を狂わせているらしく、なんとなく全員が私のほうを疑わしい目で見ている。それも仕方ないだろう……私だって、この暑い中で記憶を辿るのが難しいのだ。

私はしぶしぶウェストバッグ型をした私のハンマースペースを机に置いた。酷いプライバシーの侵害で、後で訴えることも出来るかもしれないが、今は皆が早く帰れるように計らうのが仕事だろう。

しかし、暴かれるプライバシーの差は中学生の学生カバンの比ではない。手帳の一つからノートパソコンのケースまで、私の好みが行き届いているわけだし、癒されるための絵本とか友達にもらったカードとか、人に見せるために入れているわけではないものも大量にある。

私はなるべく素早く、一つ一つの品物を取り出していった。小さな机の上に、積み重ねながら置いていく。私の財布にポーチ、パスケース、書籍類。ルーズリーフが分厚く重なったファイルに、スナック菓子まで。篠村さんはそういったものを冷たい目で見つめながら、私の手をじつと観察している。私がお気に入りの絵本を取り出したときには、その淡い色合いを見て鼻で笑った。

「これで、全部……です」

私が顔を上げた。机の上に並ぶものは、私が外に向けて必要なものの全てだ。

「本当？ 隠してないでしょうね」

「じゃ、見て御覧なさいよ」

私はさすがにむっとして、ハンマースペースのタグを示す。機能面ではかなり優れている私のハンマースペースは、入っているものの総重量がタグ型の小型画面に表示されるようになっていたのだ。

はつきりとした「0 kg」の表示に、しかし篠村さんは業を煮やしたらしい。

「何よ、そんなのいじれるんじゃないの!？」

「い……いじれるって、無理でしょ……?」

「あんた理学部なんでしょ!？」

「そうだけど!！」

篠村さんが理学部を工学部と同列にしているのはまあいいとして、私はいわれのない抗議に思わず声を荒げた。見ていた他の人もさすがに見かねたのか、場を沈めようとするが、今更篠村さんを止められない。

「ちよつと貸しなさいよ、あたしが試すんだから!」

あろう事か彼女は、私のハンマースペースを取り上げようとした。「ちよつと、やめてよ!」

私は慌ててハンマースペースをひったくって、手元に戻す。

別に空っぽだからいいじゃないか、と言われるかもしれない。しかし……ハンマースペースというのは、私の日用品だけを入れてお

ける、私だけの空間なのだ。そういう意味では私の部屋とそう変わらない……いくら綺麗でも、疑いの目を持った相手に立ち入られたくなんかないのである。

「もういいでしょ、なかったんだから」

「ないなら確認させなさい！」

再び押し問答になり、とうとう収束がつきそうになくなった、そのとき。

「美咲？」

「恭二！？」

「店長さんに聞いたら、こっちだって言ってたから……」

控え室の扉を半分ほど開けて中の様子を見た恭二は、騒然となった現場に少々たじろいだようで、そのままこちらに近付いてこようとしなない。

「恭二、どうして来てくれたの？」

「いや……あんまり遅いから。もう昼食って時間でもないよ」

新しい登場人物の出現は、現場の混乱を多少鎮めたらしい。恭二は見た目はまずまずだし……私は手を軽く動かして状況を示した。

恭二はにこつと笑う。

「もう一度……落とした人のハンマースペースを確認してみなよ」

「あたしの！？」

篠村さんが頓狂な声で聞き返す。私も啞然となったが、恭二はぼんやりした笑顔を崩さない。

「ええと、財布だったよね？ 何色？」

「白よ！ デイオールのなんだから！」

「それを、人と買い物に行こうと思って出そうとしたけど、出てこなかったんだ」

その辺のことは、電話で私が説明していた……単なる愚痴だった

のだけれど。

「それが一体、どうしたっていうの!？」

「もう一度試してみなよ。見た目のイメージのことをよく考えながら、いつも通りに」

「でもっ……」

「そうね、試してみなよ」

先輩格の人も助太刀したので、篠村さんは仕方なさそうに自分のハンマースペースを取り出した。目を閉じて、よくイメージして……

引っ張り出された手の中に、白い財布がしっかりと納まっていた。

* * *

「どういう事が説明してよ、恭二」

今日は私も恭二も自転車だった。タイル張りの広い歩道を並走しながら、私は恭二に問いかける。

「簡単さ。……あの子の白い財布は、ずっとハンマースペースの中に入ってた。でも、あの子がその時取り出したかったのは、その財布じゃなかったんだよ」

「え? ええと……」

恭二はにやにやして、私の方を見ている。私は息をついて考えをまとめながら、こう聞いてみた。

「その事って……関係あるの？」

あの財布がフェイクだった事と」

「あ、あれ偽者なんだ?」

「そうよ。よく出来てたけどブランドじゃないわ。大方リサイクルショップか何かで手に入れたんじゃない?」

「そうか……うん、そういう事だよ」

私はまた、息をつく。

「つまり、その場に人がいたせいで、篠村さんは『自分の財布』よりも『ブランド物の財布』を取り出そうとした。それで、本当はブランドじゃない財布は反応しなかったのね」

「うん、多分」

横断歩道に、並んで止まる。

「ハンマースペースの事は、だいぶ調べたから……」

「ふーん」

そして、また走り出す。

「そういえば、浩介と千奈美は？」

「それが……控え室に入る前に電話して、だいぶ揉めてるみたいだ
って言ったら、それじゃあ千奈美ちゃんと喫茶店に入って待ってる

……って」

「あれれっ」

私はおどけた口調で言って、しばらく考える。

「それじゃ……二人はそのままにしてあげたほうがいいかもね」

「じゃ、そういう風にメールしておこうか」

ちようど路肩に駐車場があつたので、一度自転車を停める。恭二がシオルダーバッグ型のハンマースペースから携帯を取り出して操作するのを見ながら、私はこんな風に言ってみた。

「恭二は、この後どうする？」

「えっ……？ ……さあ」

「じゃあ、映画館行こうよ。今日はちよつと安かった気がするし」
間違つても浩介が私たちと鉢合わせないための配慮だ。言ってみれば、浩介のため。もちろん、恭二のためなんかではない。

ましてや、決して、私のためでは……決して、ない。

（2）中身がしれない（後書き）

ずいぶん遅くなりましたが次話です。

もう少しきやぴきやぴした話が書きたいなあ（苦笑
よかったら感想批判などお寄せください。

(3) 捨てたいものは

授業が終わって、ファイル類をハンマースペースに放り込んでい
ると、後ろの机から晴香が話しかけてきた。

「ねえねえ、この後買い物行かない？」

「うん？」

「大通り沿いの新しい雑貨屋さん」

「あ、いいね」

何気なく応えてから、私はもう一度考えてこう付け加えた。

「あ。じゃあ、その後一緒に課題やらない？」

「そうだね、火曜のでしょ？ あれ重いもんねー」

晴香はぴかぴかの腕時計を見ながら笑顔で言う。

「いいよ、うちに来て二人でやるうか」

晴香はとても人懐っこくて話しやすい、私の一番の遊び相手だ。

大学に入学した直後から、何かに付けて話しかけてくれた。私の方
は人に馴れ馴れしくするのがどうしても駄目で、小学校の頃からい
わゆる「仲良しグループ」に入れずに困っていたくちなので、晴香
のような相手が一人いてくれるととても助かる。退屈しないし、寂
しい思いもしなくて済む。

大通りの新しい雑貨店は見た目どおり狭かったが、私の大好きな
輸入物が所狭しと並べられていて、その趣味のよさは目をとるけさ
せるに十分だった。

部屋の鉢植えに添えると可愛いのではないかと思って、木製の小
さな人形を買ってみる。それから、絵本風の表紙のメモ帳。筆記用
具を眺めていると、晴香は色違いのキーホルダーを二つ持っていた。
「ん？ どっちにするの？」

「両方買っの」

晴香は楽しそうに笑って、会計に並ぶ。

「贈り物？」

「その予定。でも、可愛いからあたしが二つ付けちゃおうかな」

昔の少女マンガなら、晴香は顔をくしゃくしゃにしていたに違いない。口の端から小さく舌を出していたりしたかも。くだらない想像だが、晴香はなんとなく、そういう描写の似合うところがあつた。いたずらっぽくまた微笑して、晴香は包んでもらったキーホルダーをハンマースペースに放り込んだ。

この大学では珍しいことなのだが、晴香は自宅から通学している。晴香の家から大学までは自転車で十五分くらいで、私のアパートは大体その中間地点にある。入学当初は連れ立って通学することもあつたが、今は授業が重なることも少なくなつた。それに私は車に乗るようになったし、晴香の方は原付を使っている。

なににせよ、自宅から大学に通えるというのは羨ましいものだ。晴香自身はいつも「夜更かしが出来ない」「部屋が狭い」などと言っているが、整った環境があるのはいい事だ。今日も晴香の家に行くこと、ちゃんとしたお茶とちゃんとしたお菓子を頂いた。

授業で配布されたプリントを頭に浮かべながら、ハンマースペースに手を入れる。

とりあえず課題を机に広げ、取り留めなく話しながらシャーペンを動かした。

「あのキーホルダーさ」

私は計算式を書き終えて（証明が上手くいったので、かつこよく

「QED」などと書いてみた）、晴香の方を見る。

「やっぱり、彼氏に贈るの？」

晴香は、今度は本当に少しだけ舌を出して見せた。

「えへへ、まあねー。もうすぐ一年の記念日だから」

「あ、もうそんなになるんだね。ご馳走様ー」

「へっへーん」

まるで屈託なく、晴香は彼氏の自慢をしてみせる。それによると年上で社会人らしく、「かつこよくて超優しい」らしいが、私はまだ会った事がない。

「いつ渡すの？」

「今週末かな」

「喜んでくれるといいねー」

「うん！」

私は、終えたレポートをハンマースペースに片付けながら、晴香の嬉しそうな顔を眺めていた。

日曜の夜、恭二が電話を寄越した。

ひどく珍しい事というのは、連続して起こるらしい。

私は寝巻き代わりのジャージを羽織ったままで、学校に近いコンビニの前に車を停めた。

小走りで近寄ってくる恭二（本気で焦ると、車を見分ける能力も高まるらしい）が、晴香を連れてくる。

電話で聞いたところでは、恭二はコンビニの前で晴香と鉢合わせたらしい。

「ごめんね恭二、迷惑かけて」

「いや。それより……」

晴香は恭二が促したので車に座ったが、ぴくりとも動かない。

「……やっぱ僕、ついていけない方がいいね」

「うん。あの、ごめん」

「いいよ。明日話そう」

「うん」

私は車をスタートさせた。コンビニの明るさがイラついた。

車を回して、人のいない公園に降りた。ここは大通りからも遠いし、この時間帯なら誰もいないに違いない。

晴香を促して、ベンチに座る。

「……あのさ」

「疲れたって」

「え？」

晴香は糸が切れたように緊張を解き、口を開いた。

「私といると疲れるんだ、って。私といても楽しくなくなってきた、会うのが面倒になってきたんだ、って」

「あのさ、晴香」

「あたしは何も言っていない！ ご飯奢れとか、プレゼント買えとか、そんな事一度も言った事ないじゃん！ 何、勝手に自分でカッコつけて、それで辛くなってきた疲れた、よ！ あんたなんか構ってられない！」

「晴香？」

「構って、られない……よ……」

予想通りだった。

誰とも分らない馬の骨が、適当に晴香と遊んで、それで疲れたからと言って会わないことに決めたのだ。一方的に。一瞬で。

私にはどうしようもない。

向こうを責めて晴香を擁護するのもなんだかおかしいし、だからと言って晴香を納得させるなんて出来るはずがない。
だから。

「わかったよ。大変だったね」

私は晴香の肩に手を置いた。

「ね、失敗するのは仕方ないよ。こっちも相手も人間だし。だから、もう忘れちゃおう？」

それしか、私は方法を知らない。

「うん」

晴香はひとしきり感情を放出したようで、疲れた顔でうなずいた。

「美咲」

「何？」

「もらったもの、全部いらないから……捨てるね」

「うんうん、捨てちゃおう」

晴香は、肩から提げていたピンク色のハンマースペースを膝に乗せ、手を入れた。

はじめに出てきたのは、ぐちゃぐちゃに絡まったキーホルダーが二つ。晴香はそれを、茂みの中に放り込んだ。

リングノート。

ピ阿斯。

タオル地のハンカチ。

大人っぽい絵本。

ポストカード。

髪留め。

お菓子の包み紙。

映画館の半券。

写真。

写真。

写真。

「ねえ」

晴香は私に笑いかけた。

「あの人の事忘れたいのに……忘れたいから捨てたいのに、あの人のことを思い出さないと、何も取り出せないの」

「うん」

月も出ていない夜だった。

(3) 捨てたいものは(後書き)

お久しぶりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9211b/>

ハンマースペース

2010年10月27日14時05分発行